The Danube Quarterly

ドナウの四季

2018年・新春号・No.37

GEREワイナリーレセプション	盛田 常夫	1
見事決勝に進んだ原口さんに聞く	桑名 一恵	2
仙台における東日本大震災の名残	キシュ・ハイナルカ	4
てらこやクラブ	キラーイ・エディット	5
三つの誕生会	盛田 常夫	7
運命の足音を聞く	佐藤 和彦	10
Tokióハンガリークラス	ホルヴァート・ジュンジ	11
みどりの丘日本語補習校	藤岡 摩里子	14
	岡本 聡子	15
ブダペスト日本人学校	大久保 雄司	17

在留邦人の季刊誌／The Japanese Community Bulletin

ハンガリーを代表する赤ワインワイナリー

GEREワイナリーが日本人のワイン愛好家の皆様に、通販サイトを開設しました。

www.gere-club-japan.com

GERE

GERE ATTILA PINCÉSZETE

最高級赤ワインのセットを、ご自宅に配送します。
日本へは国際宅急便（6本の配送費90ユーロ）で、
ハンガリー国内は200ユーロ以上の注文で送料が無料になります。

各種ワインセットの他に、低温圧搾ぶどう最高級オイル、
ぶどうの種と果皮をミクロンのサイズに粉砕した、
ポリフェノミクロンも、通販サイトを通して購入できます。

GERE-CLUB-JAPANの会員になれば、
各種の特典が得られます。GERE ホテルの予約も、
通販サイトを通せば、日本語で予約ができます。

www.gere-club-japan.com

GEREワイナリー・レセプション、東京で開かれる

盛田　常夫

去る10月16日夕刻、東京のハンガリー大使館にて、GEREワイナリーの紹介レセプションが開催された。GERE　Attilaさんの長女GERE　AndreaさんとCsizmádia　Kristofさんご夫妻がホストとなり、ワイナリー紹介プレゼンの後、ミニコンサートで場が盛り上がり、その後立食パーティとなった。

当日は、小林研一郎夫妻、芳村真理さん、辰巳琢郎さんご一家を初め、歴代の在ハンガリー日本大使やハンガリー関係者が一同に会し、遅くまでハンガリー料理とGEREワイナリーのワインを楽しんだ。

会はパラノヴィッチ大使の挨拶で始まり、GERE ワイナリーの紹介ビデオ、GERE Andreaさんのプレゼンを聞き、その後ミニコンサートとなった。コンサートでは、ハンガリーのピアノ界を代表するファルカシュ・ガーボル（現在、東京音大特任教授）、日本で活躍するクラリネット奏者コハーン・イシュトヴァン（東京音大講師）とヴァイオリン奏者の浅野未希さんが、ハンガリーにちなんだ曲目を演奏した。

ミニコンサートが終わったところで、マエストロ小林から一言ご挨拶をいだき、辰巳琢郎さん一家をご紹介された。長女の辰巳真理恵さんは二期会所属のソプラノ歌手だが、高校時代にマエストロが歌唱指導したことを話され、マエストロのピアノ伴奏で、真理恵さんがプッチーニのオペラ「ジャンニスキッキ」より、「私のお父さん」を歌うという楽しい一時があった。

その後、会は立食パーティに移り、パラノヴィッチ大使の音頭で乾杯し、ワインとハンガリー料理の夕べとなった。

なお、GEREワイナリーのワインやブドウ製品（低温圧縮オイル、赤ブドウ果皮・種子のミクロ粉末）は、日本人向け通販サイトを通して注文できる。通販サイトは以下の通り。

https://www.gere-club-japan.com

左から辰巳琢郎さん、GERE・Andreaさん、小林研一郎さん、辰巳真理恵さん、Csizmada Kristofさん

ミニコンサートの演奏者を囲んで

GEREワイナリー紹介レセプション
コンサート・プログラム

Fakas Gábor（ピアノ）
Schumann-Liszt, Widmunk（献呈）

Kohán István（クラリネット）-Farkas Gábor（ピアノ）
Brahms, Hungarian Dances（ハンガリー舞曲） No. 5

ASANO Miki（ヴァイオリン）-FARKAS Gábor（ピアノ）
Monti、Csárdás（チャールダーシュ）

2017年10月16日
駐日ハンガリー大使館

第1回マエストロ・ショルティ記念国際指揮者コンクール
見事決勝に進んだ原口さんに聞く

聞き手　桑名　一恵（くわな・かずえ）

15年ぶりの開催となった国際指揮者コンクール、「マエストロ・ショルティ国際指揮者コンクール」のファイナリストとなった原口祥司さん。10月にブダペスト行われた書類審査と第1次予選を通過し、場所を移してペーチで行われた第2次予選を見事通過し、12月に再びペーチで行われた最終6名（2次予選通過5名プラス視聴者推薦1名を含めた6名）によるファイナルに進みました。ハンガリー在住5年目、リスト音楽院留学・卒業を経ての今回の挑戦を、ペーチ市よりブダペストへ帰られてすぐにインタビューをさせて頂きました。

桑名：今回の出場きっかけは？
原口：昨年（2016年）バルトーク音楽祭に参加した際に、今回のコンクールの主催者でもあるフィルハーモニアから2017年にハンガリーで指揮者コンクールが開催されるので是非参加しないかとお誘いを受けたことがきっかけでした。その後、参加要項を頂き5月申請し7月に1次審査結果が届いてから7月～12月15日のファイナル（本選）まで約5か月半かけて課題曲全28曲を準備しました。今回約40カ国から186名（書類審査段階）の参加者と共にスタートし、ファイナルの6名まで挑みました。

桑名：「マエストロ・ショルティ国際指揮者コンクール」という名称では第1回となりますが、久々のハンガリーでの指揮者コンクールの誘いを受けた時はどう感じましたか。
原口：ハンガリーで開催されるのは約15年ぶり。43年前に第1回が開催された時の優勝者が皆さんもご存知の小林研一郎さんでした。小林先生はそこから一気に国内外で知られる指揮者としての地位を得られたことを知っていたので、是非、自分も先生の後を追いたいという気持ちがありましたので今回チャレンジしました。

桑名：約半年間という、とっても珍しい長期戦の国際コンクールだったと思うのですが。
原口：ありえない・・・（笑）

決勝の舞台（@Andrea Felvégi）

桑名：そのありえない中（笑）、ありえない課題曲数かと思うのですが、どのように選曲されたのでしょうか。
原口：自分で選曲することはできず全て抽選で、しかも前日に知らされることになりました。

夜8時に抽選が始まって、翌日から審査が始まるという形でしたので、抽選まではその審査ごとに出ていた約8曲程度の課題曲すべてを学ぶ必要がありました。例えば1次審査ではハンガリー国立オペラ座オーケストラがエルケル劇場で演奏を担当しましたが、オペラの序曲などが課題になっていました。1人15分間と決められた短い時間の中で、次のラウンドに行けるか行けないかが決まってしまいました。第1次・2次審査までは本当に厳しいステージだったのではないかと思います。

桑名：その短い時間で、どうパフォーマンスしていくのか心がけたことは何でしょうか。
原口：1次審査はオペラの序曲が中心でしたので、その曲を学ぶのではなく、その曲が使われているオペラがどのような物語で、どの部分に使われていて、どのような歌詞が付いているのかなども含めて準備をしました。実際にその内容を試されている部分もありましたし、国立オペラ座のオーケストラは指揮の判断を即座に感じ取りますので、何が良くて何が悪いのかと、ある意味オーケストラメンバーが審査員と言っても過言ではなかったかと思います。

演奏後とても手ごたえがありましたし、自分のやりたいことに対してオーケストラが反応して返してくれたことがとても嬉しかった。それがあって2次審査へと駒を進めたんだと思います。

桑名：1次審査通過から2次審査まではどんな風に進んでいったのでしょうか。
原口：1次審査結果を受けて嬉しさもつかの間、すぐに2次審査の課題曲抽選が始まりました。今度は場所もブダペスト市からペーチ市に移動したので、気持ちを切り替えて移動の間も課題曲の準備に取り掛かっていました。課題曲はアリアもしくはコンチェルト（協奏曲）、そして規模の大きくない交響曲を、2次審査に駒を進めた15名が抽選で選曲しました。私はショパンのピアノ協奏曲ヘ短調2楽章とシューベルトの交響曲第5番を引きました。ショパンの2楽章は協奏曲とはいえアリア的で、とにかくRecitativo（レチタティーヴォ、話すように歌う）楽曲とも言え、表現するには難易度が高いものだったので、「何て曲を引いてしまったんだ」と思いました。他の交響曲は

経験があったのですが、シューベルトの交響曲は初めて挑戦する曲でもあったので気が引き締まる思いでした。2次予選のオーケストラはジュール市交響楽団が担当してくれましたが、ジュールへは今まで何度もコンサート通いましたから、どういう風な響きのオーケストラなのかを理解していましたので準備は出来ていました。

桑名：そしていよいよファイナリストとして挑んだことはなんでしょう。

原口：まず、ファイナルの抽選で課題曲6曲中バルトーク「舞踏組曲」を引きました。6曲の中でも一番やってみたいと思ってはいましたが、一番難しい曲だとわかっていたので、「まさかここで引いてしまったか」という思いでした。今回チャレンジを共有してきたファイナリストの指揮者達からもアドバイスをもらい、リスト音楽院指揮科時代からの仲間からもどう挑めばよいかというエールを頂きました。もともとハンガリーに留学するきっかけとなったのがバルトークとコダーイ作品を習得することからでした。今日までバルトークの住んでいた14か所の家を周ってみたり、博物館や研究所に足を運び、自筆譜を閲覧させて頂いたり、ナジセントミクローシュ（現在のルーマニア）のバルトーク生家を訪問してみたりと、実際にゆかりの地に足を運びながらバルトークがいつ、どこで、どの作品を、どの民謡や景色を取り入れて作ったのかなどを肌で感じながら情報収集してきたので、この経験をフルに出して当てて行こうと取り組んでいきました。「舞踏組曲」は仕組みが複雑になっていて、ハーモニー同士が重なって出来る「歪み」で出来る緊張感が常に存在していて非常に難しい。さらに、これを表現するには、それらをかなり理解し、合わせていかないと効果が出てこないものだと感じていました。今の自分が出来る精一杯の理解力で、緊張感をもって臨みました。ファイナルのオーケストラはペーチ市のパンノン交響楽団が担当してくれました。前日のリハーサルでの修正時間なども含め、与えられた時間の中で出来ることは限られていますので、それをどうステージ上で作業していくかを考える時間が必要でした。

コンクール時のオーケストラの響きは面白いもので、指揮者が順番にある一定の時間を振っていくので、振りはじめた時には前の指揮者の音がするんです。なるべく早い段階で自分の音もしくは作曲家の音に作り上げていく所に、自身の技術やスキルが必要となっていく訳ですが、前半は思っている方向に近づけていく作業、後半は自分の思う方向に変化させていくことが出来ました。バルトークの作品は今まで何度かやったことがあるのですが、冷静さを保ってないと演奏できないようにバルトークが書いると承知していたので、そこだけは

ペーチの会場に駆けつけた応援団

冷静でいることが出来たのではないかと思います。

審査終了後、審査委員長でもあったウトゥヴシュ・ペーテル先生から、「まるで侍の如く取り組んでいましたね。曲はenemy（敵）ではないよ。緊張のみならず、やはりくつろげる場所も貴方の音楽から感じられると更に良かったと思う」というもったいない位の誉め言葉をいただきました。「今の自分をクリアに見られていたな」と感じ取ることが出来ました。そして自分の課題ともなる重要な指摘だなと思いました。本当にこのようにコメントして頂き有難かったです。

桑名：バルトーク作品の難しさとは。

原口：バルトーク自身が、実際にある出版社宛に手紙を書いているんです。

「私の作品は、良いオーケストラと良い指揮者でないと良い演奏にはならないのです。ですから、良いオーケストラ、良い指揮者でければ、私の作品を演奏しないでください」、と。

でもこれが、全てなんだと思います。

桑名：ほかの審査員からコメントなどは頂くことは出来たのでしょうか。

原口：これも面白い部分だと思うのですが、テレビ放送が企画されていたため、コンクール全体がオーデション番組のような形で進行しました。1・2次審査共に自分のステージが終わった瞬間、会場の皆さんの前で、審査員からコメントを頂くというものでした。5年前にハンガリーに来た時から注目しているハンガリー人指揮者ケシェヤーク・ゲルゲイ（Kesselyák Gergely）氏が今回の審査員の中にいることがとても嬉しかった。好きな指揮者に自分の音楽表現がどう伝わってくれるのかと思うと、もちろんコンクールでもあるのですがチャンスでもあります。そのチャンスが生かせなかったという心配もありました。

ファイナルが終わってからですが、ケシェヤーク氏からとても嬉しい言葉を頂け、今後の可能性について話すことができ、そのような機会が得られたことに感謝しています。

桑名：結果がでるまではどのように過ごしていたのでしょうか。そして結果は。

原口：今回ありがたいことに、ファイナルリストとなったことで多くの方の応援を頂きました。決勝当日にはハンガリー留学している日本人学生、日本を含めた国外（ドイツ・イタリアなど）から30名位の応援してくれる仲間が駆けつけてくれました。出番が終わったらすぐに会場に行き、皆さんにお礼を伝えました。初対面の方もいらっしゃいましたので、とにかく感謝の気持ちを伝えました。結果はメディアも入っていた為、掲示ではなくステージ上での授賞式となりました。

入賞はなりませんでしたが、Peter Eötvös Contemporary Music Foundationより特別賞受賞及びセミナー参加権利、そして副賞として2018-2019 年度のバルトーク音楽祭（ソンバトヘイ市）及びバルトーク・オペラフェスティバル（ミシュコルツ市）への指揮者招聘権利を頂きました。バルトークを習得する為にハンガリーに留学した自分とっての最高の副賞となりました。今思えばファイナルでバルトークを引いた時から、バルトークが私に次の課題を与えてくれたような気がします。

桑名：原口さんにとって今回は指揮者人生の一つの通過点であると思いますが、選択した道が何故指揮者だったのか、そして今後の目標・予定などを聞かせてください。

原口：指揮者を目指したのは少し遅い時期からでした。当時まだ高校の教員でありましたが、現在の日本の師匠でもある下野竜也さんのコンサートを聴きに行き大変感銘と刺激を受け、直談判したのがきっかけです。音楽をさらに追及したいという気持ちが抑えられず、指揮者としての道を選びました。ハンガリーとの出会いは高校時代に吹奏楽部の演奏旅行でハンガリー（ブダペスト市、デブレツェン市、ケチケメート市）に演奏訪問しました。その時に、ハンガリー人の溢れすぎている温かい人間味に打たれ、いつかハンガリーで勉強したいなと考え始めました。

音楽の教員時代には世界的にも有名なピアニストでもあったコチシュ・ゾルターン氏のバルトーク集のＣＤを良く聴いていました。なぜそうだったのかと言われると説明できないのですが、今思い返せば偶然が必然だったなと考え深いですね。そしてリスト音楽院指揮科に在籍し大学院過程を卒業しました。ここではハンガリーを代表する名指揮者メドヴェツキー・アーダーム先生との出会いが何よりも大きかったです。彼の許でもっともっと勉強したいこと大きな理由の一つですが、音楽院での指揮科のカリキュラムがとても充実していて、指揮者としての技術だけでなく指揮者として必要なスキルを様々な角度から学べたことに満足しています。

活字にしてしまうと受け取りが様々になりますが、基本は「いい音楽家になりたい」です。引き続きバルトーク作品の研究はもちろん、両国の作曲家の描き伝えたいこと（作品）に対して正しい解釈と理解を経て表現出来るような指揮者でありたいと考えますし、日本とハンガリー両国の多くの作品を披露できるような環境を作っていけるように活動したいと思います。自分のモチベーションを高めて行くためにも、コンクールやセミナーなど参加出来るものには積極的にエントリーしていきたいと思っています。早速2018年には第2回アンタル・ドラティー指揮者コンクールがハンガリーで行われますので早速準備に取り掛かって行きます。

また、バルトークがそうしたように、ハンガリーの地方に赴き、現地の人たちとふれあうことで、人間としての魅力も養いたいです。

（2017年12月18日）

仙台における東日本大震災の名残

Kiss Hajnalka

仙台にある東北大学に留学することができると知ったとき、すぐ仙台市について調べてみました。仙台の地理は、西部は山々、中部は丘陵、東部と海岸は平地のようでした。その時、私はその東部の平地は全部田んぼだと思いましたが、実は違いました。

留学が始まったばかりのころ、海を見に行きました。海岸に近づくと、その風景を見て分かりました。その平地は、田んぼではなく、一頃は賑やかな町であった、東日本大震災の津波に流された所でした。その日は、海がとても大らかで、雑草に隠れている家の土台の景色も平和で、いつかあんな災害が起こったのを想像できませんでした。

先日、東北大学の学生サークルが行ったイベントに参加しました。それは2011年3月11日の東日本大震災についてもっと詳しく教えてもらえるきっかけになりました。当日のプログラムは、仙台の荒浜という海岸をきれいにしたり、地元の人たちと一緒にお昼ご飯を食べたり、旧荒浜小学校で津波について教えてもらったりすることでした。海岸でごみを拾うのは簡単なことでしたが、それだけで私も被災地の再生に少しでも手伝えたと思います。そのあと、よく荒浜にボランティアに行く地元の人たちとお昼ご飯を作って食べることもできました。その地元の人たちと一緒に海岸にある記念像で黙とうしました。記念像のほかに、大観音像もありました。この二つは大震災そして失った人々を忘れないためにあります。

荒浜小学校では、荒浜に住んでいたおばさんに津波について教えてもらいました。被災地の平らな風景のなかで、旧荒浜小学校だけが立っています。あの日、荒浜の住人は荒浜小学校に避難して地震のあとの津波から生き残りました。コンクリでできているその校舎も、記念として残されています。災害を紹介する博物館のようなものです。あの日多くの人が避難した学校はもう学校として機能することはありませんが、記念場所そして避難場所として残っています。

学校のなかに、津波直後に撮られた写真が掲示されていて、当日についての動画も見られます。災害の深刻さがよくわかります。波打ち際から約700メートルにあるその学校の一階は大津波に流された瓦礫によって完全に潰されました。波が三階まで届いたので、避難した住人は屋上に逃げ出さなければならなくなりました。屋上から、10メートルもの高さの津波が木々、家、人を流すのを見た避難者は、その景色を一生忘れられないそうです。

東日本大震災から6年以上経っていますが、今日も災害からの再生はまだまだです。被災地に住むことは禁止されていますが、また大津波が起こる場合に備えてダムが建てられています。災害を経験した人によると、こんな荒廃が起こったことは信じられませんでしたが、それ以来、何が起こったかを忘れないように、なるべく多くの人に大震災について伝えるようにしているそうです。なぜなら、地震と津波について知れば知るほど、多くの人が逃げられると信じているからです。私のようなヨーロッパ人には地震や津波の衝撃とそのあとの再生の大変さは想像もできないかもしれませんが、こんな災害から何度も立ち上がる日本人を尊敬します。私はこのイベントに参加させてもらって大震災のことが分かり、とても勉強になりました。

（キシュ・ハイナルカ）

てらこやクラブ

Király Edit

エルテ大学（Eötvös Loránd Tudományegyetem）では2017年秋学期に「てらこやクラブ」が結成されました。

「てらこや」というのは何でしょうか。日本人の方はきっとご存知だと思います。寺子屋は江戸時代に京都や大阪で読み書きや計算を教えていた学校のようなものです。私たちは少し非日常的なクラブの立ち上げを考え、「てらこやクラブ」を作りました。江戸時代の寺子屋のように、このエルテ大学の会話クラブが日本語を練習しながら様々なことを学べる場所です。

日本語の会話の練習ではバラッシ学院（ Balassi Intézet）やエルテ大学をはじめ、様々な大学で勉強中の日本人留学生のみなさんに協力いただき、日本学科の学生たちが日本語の会話能力を伸ばそうとがんばっています。発表も行われています。毎週異なる内容で、日本人でもよく知らない日本に関する事や、ハンガリー人でもよく知らないハンガリーに関する事が取り上げられています。

例を上げるなら、読者のみなさんは「三黙堂」ということについて聞いたことがあるでしょうか。あるいは、江戸時代の日本人は藍染の浴衣をなぜ夜に着ていたかご存知ですか。精進料理は大きく分けて二つの食材を避けるべきだといわれていますが、その食材とは何でしょうか。

また、ハンガリーのLuca nap（ルツァの日）の習慣はご存知ですか。12月13日にもしかして仕事しましたか？それは大きな問題かもしれません。クリスマスに机の上に蜂蜜、にんにくやりんごがおいてあるのをご覧になったことがあるでしょうか。それらはどうしておいてあるのでしょうか。

これらはすべて、日本とハンガリーの習慣について学ぶことを目的の一つにしている「てらこやクラブ」で話し合われたトピックです。大阪大学ハンガリー語科で映画の字幕作りが行われたというのを参考にして、私たちも日本のアニメの字幕を作っています。この翻訳活動はハンガリー人にとっても日本人にとってもお互いの言語の勉強になります。

このように、「てらこやクラブ」では言語や文化の知識を身に付けることもできますが、それより何より、メンバーたちは素晴らしい人間関係を築くことができました。

私がこの記事を書いている今は12月ですが、クリスマス休暇と試験期間を経て、大学は2月から新学期に入ります。「てらこやクラブ」は来学期も続ける予定です。ハンガリーや日本に関する、本では調べにくいことについても話を聞くことができると思いますので、興味がある方はぜひお越しください。

ご参加お待ちしております！　フェイスブックページもあります。「Terakoya　Club/てらこやクラブ」https://www.facebook.com/groups/1512865082141082/

（キラーイ・エディット）

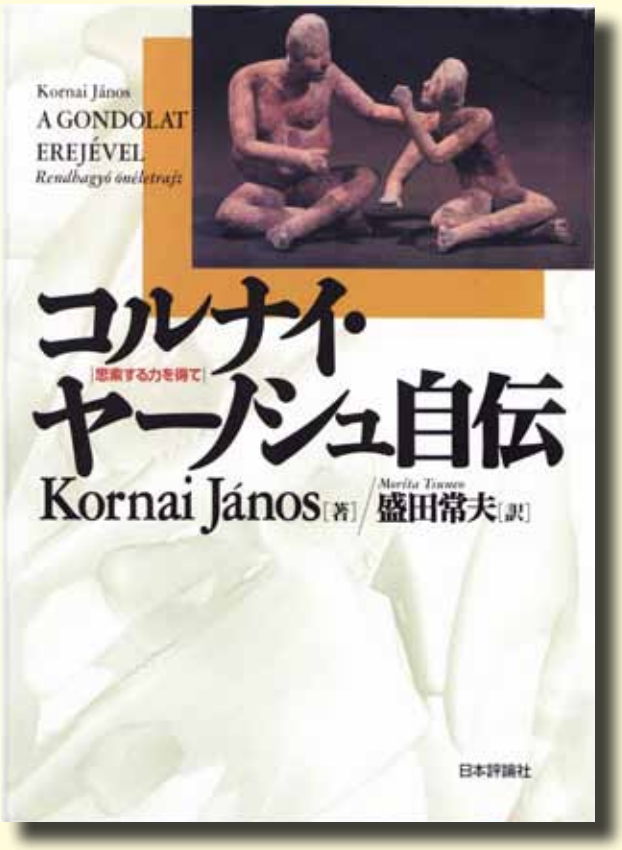
三つの誕生会

盛田　常夫

11月から12月初めにかけて、立て続けに誕生祝いを兼ねた集まりがあった。一つは経済学者コルナイの新刊Látlelet（「私の診断」）の出版記念と90歳の事前誕生会を兼ねた集まり（2018年1月に90歳）。二つ目が映画監督コーシャ・フェレンツ80歳を記念したポートレイ映画上映と対話の会。三つ目がオペラ歌手でリスト音楽院声楽家教授パスティ・ユーリア70歳を祝うコンサート。それぞれ各界を代表する人物で、個人的な付き合いのある友人たちである。

コルナイの出版記念会への招待状が週刊経済誌HVG社からメイルで届き、出席の意思を事前に出版社に伝える必要があった。しかし、記念会当日まで、出席申し込みを保留した。というのは、新刊本はハンガリーの政治にたいするコルナイの現状認識を示したもので、「ハンガリーは2010年のFIDESZ政権発足時からU字カーブを描いて、後戻りする道に入った」、「独裁的な資本主義ははたして維持可能なシステムだろうか、中国のシステムを輸入することができるのだろうか」という紹介文が添付されていたからだ。この分析の適時性や正鵠さに頷くことができず、出席の意欲が沸かなかった。

コルナイ経済学との付き合いは40年近くになるが、体制転換前までのコルナイの分析と、それ以後の分析では大きくスタンスが変わっている。体制転換以後は、政治的な発言が多くなっただけでなく、加齢とともに白か黒かという単純な二分法に陥り、分析の面白みがなくなった。だから、コルナイの書籍を翻訳紹介する仕事から手を引いてしまった。唯一、2005年に発刊されたコルナイの自伝だけは非常に良くできていて、ハンガリー語出版から1年も経たないうちに日本で出版（『コルナイ・ヤーノシュ自伝』日本評論社、2006年）することができ、その年の経済学書ベストテンに入るなど大きな反響を呼んだ。しかし、その後も、コルナイの政治経済の現状分析は平板で、それをまとめた書籍の翻訳依頼があっても引き受けなかった。



出版記念会の前日、フィットネスクラブの更衣室で政治学者のケーリ・ラースロー（現オルバン首相の大学時代の恩師）と顔を合わせた折、「明日、コルナイの記念会で会うよね」と声をかけられ、つい「そのつもり」と答えてしまった。「各界からいろいろな人が集まるようだ」とも教えてくれた。10年前にハンガリー経済学会が主催した80歳の誕生記念会には、知人・友人の経済学者のみならず、当時のジュルチャニィ首相夫妻も参加していた。だから、今回も反政権の知識人・学者がのみならず、ジュルチャニィ率いる政党DMや社会党の政治家も参集するのだろうと予想した。

記念会当日、HVG社へ出席の意思を伝えようとしてメイルのリンクをクリックしたら、「すでに満席で参加受付は終了」というメッセージが返ってきた。「それでも出席したい方は空席がある場合にのみ入場可能」とあった。これで「行かない」決心がついた。

私は、コルナイが考えるように、「ハンガリーは資本主義経済である」とは考えていない。そのことは2008年と2012年（改訂版）にハンガリーで刊行した拙著Valoság és örökség「現実とレガシー」（Balassi　Kiadó）で分析している。資本家がいないどころか、発展した市場経済からもほど遠い「国庫経済」であるというのが、私の主張である。国民所得の半分を国庫に経由させ、補助金行政で動かしている歪な経済である。まして、このようなハンガリー経済を、自生的な市場経済と資本主義企業家が躍動している中国と比べることなど意味がない。コルナイの分析はステレオタイプの類型化に陥って、新しい発見がない。だから、私は体制転換以後のコルナイの現状分析に関心がない。

翌日、ケーリによれば、「会は大盛況で、多くの学者・知識人で一杯だった。コルナイは2時間も自説を語り続けて、今になって再び最初の著作である『経済管理の過度な中央集権化』（1956年発刊）を再説せざるを得ない現実に直面するとは思ってもいなかった」と意気軒昂に語ったという。そういう話を2時間も聞かなくて済んだのだから、やっぱり欠席して良かった。まして、反政権知識人の政治集会だったのなら、投票権をもたない外国人の私が行く必要もない。私自身は現政権の政策を好ましいとは思っていないが、現政権の政策だけが問題だとは思わない。それ以前に長期に政権を担ってきた社会党も、体制転換以後の経済社会体制の構築に責任があるし、それを支えてきた知識人にも責任がある。それを現FIDESZ政権だけの所為にするのは、あまりに近視眼的な社会分析だ。

コーシャ監督は旧体制時代に13本の映画を撮り、1968年にカンヌ映画祭に出品した「一万の太陽」は最優秀監督賞を受賞した。その縁で当時日本の舞台女優だった糸見偲さんと出会い結婚した。映画監督を志した当初から、1956年の「ハンガリー革命」の体験を映画にしたいという思いを抱いていた。しかし、1956年動乱を「革命」と表現するのは、旧体制下では禁句だった。このテーマを追求した最後の映画が、日本でも上映されたA masik ember（「もうひとりの人」、1987年）であるが、16世紀のトランシルヴァニア地方で生じた農民一揆の指導者ドージャ・ジョルジュを扱った映画Ítélet（「判決」、1970年）も、「革命」の殉教者への思いを込めたものである。この映画制作の舞台裏を語る中で、スロヴァキアやルーマニアの映画人の積極的支援を得て、乗り気でないハンガリー政府から資金を得たという逸話が紹介された。そういえば、1968年は中・東欧地域、とくにチェコ－スロヴァキアの民主化運動が最高潮に達した年であり、日本では学生運動が過激化し始めた年である。そういう時代の空気に押されて、「革命」物の映画が制作された。この時期でしか制作が許されなかっただろう。もう一つ、夫人との出会いを通して、日本の伝統や文化への関心が広がり、それが「姥捨て山」のテーマを扱ったHószakadás（「ドカ雪」、1974年）という映画になった。

コーシャ監督は体制転換を契機に、政治家へ転身した。それ以後は映画を制作していない。体制転換以後、映画を制作することが簡単でなくなった。しかし、これを現FIDESZ政権の所為と短絡的に考えてはならない。旧体制時代はコルナイにしてもコーシャにしても、書籍を出版し映画を制作することは簡単でなかったが、不可能ではなかった。不可能どころか、常に実現する力が働いていた。共産党（社会主義労働者党）独裁の時代とはいえ、ハンガリーでは学者や文化人の活動の許容範囲は他国に比べて広かった。ここが非常に面白いところだ。旧体制時代に、旧体制の問題を批判的に指摘する仕事から生きる糧を得て、それぞれの分野の成功者となったのは人生の綾というべきか。コルナイは旧体制時代に国内外で出版した体制の批判的分析書の業績が認められてハーヴァード大学教授になり、コーシャは「ハンガリー動乱」を生涯のテーマにして、体制に疑念を提起する映画監督としての地位を築き、体制転換後には新生社会党の政治家へと後押しされた。

ところが、社会体制が自由化された途端に、書籍出版も映画制作も簡単でなくなった。人集めや金策に苦労しなければならなくなった。旧体制時代には人件費も印刷費も安価で、政府や管轄団体がＯＫを出せば、必要経費は賄えた。しかし、そのような牧歌的時代は終わった。市場経済へ歩み出したハンガリーでは、どんぶり勘定の資金援助は期待できない。また、体制転換以後の社会を映画にすることも分析することも簡単でなくなった。

冷戦時代には平和か戦争かの政治的スローガンを掲げるだけで良かったが、冷戦が終わった途端に社会をどう構築していくかの具体的で複雑な構想が必要になった。社会の活動が複雑かつ多層的になり、旧社会では考えられないような経済犯罪が生まれた。政治経済社会の大きな変化の裏で生起した事件や事象を丹念に辿り、体制転換過程で生じた歴史的犯罪を映画や書籍にするのは簡単ではない。それだけではない、政権の当事者である人々や同時代に生きる者が、その政治経済社会の背後で、どのような事件や犯罪が進行していたのかを客観的に分析することは難しい。それに比べれば、旧体制社会はきわめて単純な社会だった。支持するにせよ批判するにせよ、単純明瞭な社会だった。共産党も単純に社会主義を唱えていれば良かった。しかし、そういう牧歌的な古き良い時代は終わってしまったのだ。

1994年に指揮者小林研一郎ハンガリーデビュー20周年を祝う会を組織し、オープンして間もないブダペスト・ケンピンスキーホテルで開催した。国立フィルのメンバーが各種の音楽プログラムを用意し、何度か小林と共演したソプラノ歌手パスティ・ユーリアが、小林のピアノ伴奏で、「藤棚の下に」というサトウハチローの詩にメロディを付けた小林少年14歳の作品を歌った。パスティ・ユーリアはオペラ劇場に所属する47歳の魅惑的なソプラノ歌手だった。その後、リスト音楽院の声楽家教授になった。

それから長い時が過ぎ、2011年、東日本大震災の犠牲者鎮魂のために、マーチュアーシュ教会でモーツアルト「レクイエム」のコンサートを国立合唱団とともに企画した。国立合唱団からの提案だった。桑名一恵さんが各オケからヴォランティアの演奏家を集めてくれて、パスティ・ユーリアにソリストの推薦をお願いした。演奏会にはユーリアも来るというので、楽しみにしていた。演奏会当日、17年振りに顔を合わせたユーリアを識別できなかった。私と同い年

だが、あまりの変わりように驚いた。それは別として、これを契機に、ホームコンサートやクリスマスコンサートに来てもらい、私もヘンデル「私を泣かせてください」を何度も一緒に歌わせてもらった。その後、乳がんが見つかり、闘病生活に入り、一緒に歌うことができなくなった。

その代わりと言っては何だが、お嬢さんのカロシ・ユーリアが率いるジャズバンドを、何度かクリスマスパーティに呼んだ。リスト音楽院のジャズ科で歌唱を学び、ヴァーカルとして自らのバンドを率いている。その彼女に長男が生まれからは、パスティ・ユーリアは孫の世話に明け暮れている。

70歳記念コンサートはリスト音楽院の公式行事として開催され、教え子の若い歌手たちが次々と素敵な歌声を披露した。舞台のスクリーンには若き日のユーリアの動画や写真が投影された。コンサートの最後にカロシ・ユーリアのジャズバンドが舞台に入り、ハッピーバースディを奏で、2時間ほどの記念コンサートがお開きになった。

政治集会より、映画や音楽の集まりは、心を和やかにさせてくれる。ハンガリー経済や政府の経済政策の体たらくに苛つく毎日だが、芸術分野の集まりはハンガリー生活を豊かにしてくれる。

（もりた・つねお）

Propart Hungary Bt.

各種音楽・芸術文化・国際交流イベント企画製作を 中心とした業務の運営。
ハンガリーを拠点にグ ローバルな企画・マネージメント展開を行って います。
お気軽に、御相談下さい。

【主な業務内容】

・音楽企画・マネージメント業務
・ヨーロッパ各国のコンサート /オペラ・バレエ・オペレッタ・舞踊・各劇場公演
音楽講習会 / プライベートレッスン / 音楽研修企画
・国際交流事業サポート
・若手音楽家の推進育成サポート・
・東欧・ハンガリー留学サポート・現地コーディネート
・短・長期賃貸物件仲介業務（ブダペスト市内を中心とした、ハンガリー国内）
・各種通訳・翻訳サポート（ハンガリー語、英語、ドイツ語、日本語）
・購入・レンタルピアノ
・輸入・輸出楽器
・各種現地サポート（主にハンガリー、東欧、ヨーロッパ各国）
文化・芸術関係テレビ取材・撮影・リサーチ・コーディネート等
・ハンガリー発日本語情報誌『パプリカ通信』発行
・その他、音楽制作に関わる一切の業務

Propart Hungary Bt.
Tel: +36-1-786-7846 / Mobil: +36-70-3815548
e-mail: proparthungary@upcmail.hu
proparthungary@gmail.com
web: http://propart.client.jp/

さくら DESIGN

CI、広告、ロゴ、ホームページ等
名刺１枚からご希望の言語にて
デザイン致します。
各種パッケージ、インテリアのデザイン、
内装工事、翻訳から印刷まで
幅広く受け承っております。
お気軽にお問い合わせ下さい。

SAKURA DESIGN: info@innerdesign.hu
Inner Design Group - 1021 Budapest, Bognár utca 7.
Mobile:06 20 480 4431

www.innerdesign.hu

運命の足音を聞く

佐藤　和彦

ハンガリーにお世話になり3年がたちました。本当にこの間には、たくさんの方のお世話になり、感謝の気持ちしかわいてきません。せっかくこの機会をいただきましたので、この場をお借りして、3年間で関わってくださったすべての方々にお礼を申し上げたいと思います。

本当にありがとうございました。

この3年間は、日本を天の上から見ている気持ちでした。親をなくした時、「お母さんは、天の上から見ていてくれるよね」という表現を使いながら、自分を慰めてきました。これは多くの人がやっていることだろうとは思います。ハンガリーに住んで、まさに自分がその天の上の心境でした。自分の存在しないところでも、ことがどんどん進んでいく感じが、まさにそれでした。娘に子が生まれたとか、引っ越したとかの話が伝えられてきても指一本だせるわけでなく、息子に彼女ができたと言われても、その彼女に会えるわけでもなかったからです。そんな3年間が過ぎ、日本に帰国することになります。

これから帰る日本は大きな転換点を迎えている気がします。国際協調主義に基づく「積極的平和主義」の立場から、米国を始めとする関係国と連携しながら、地域及び国際社会の平和と安定にこれまで以上に積極的に寄与するとの理念の下、国が動き出したからです。確かに、世界の情勢は緊迫の一途をたどっています。北朝鮮の脅威は増すばかりですし、ハンガリーのクリスマスマーケット一つとっても、昨年までは地下鉄の駅からヴルシュマルティ広場までのDeak Ferenc utcaにもたくさんのお店が出ていたのに、トラックによるテロを警戒して、道にブロックを設置し、広場にお店を固める方法に切り替えていました。アメリカ大統領がエルサレムを首都に認定する大統領令に署名したこのパンドラの箱を開けてしまう行為は、宗教間の対立を煽るような結果しかもたらさないことは明らかです。こういった中で、国民の安全と生命を守るためには、日本も国際的な貢献をしていなくてはならないということで、従来に比べ

2015 年

2017年

れば活発に安保法制や憲法改正の論議がされています。

私が小・中学生の頃の恩師たちは、太平洋戦争を悔いて反省し、もう二度と、そんな悲しいことが起こらないようにと1951年に出した「教え子を戦場に送るな。」の運動方針の下、反戦平和への活動に取り組んでいました。私が教員になった頃もこのスローガンが連綿として受け継がれていました。親世代の反戦意識、社会主義国との闘ぎ合いの中、資本主義国の一員として日本をつなぎとめておきたいアメリカの思惑などがあり、その傘の下で生きられた幸運に支えられ、我々の世代は、1人の例外もなく、戦争で命を落とさず定年を迎えられました。

ただ今や日本一国が反戦と叫んでも情勢はそれを許しておかないという認識で、政府の方針は、戦争を抑止するための武力、つまり戦争抑止のための武力行使（戦争）ならやむなしという方向に傾いています。もちろん集団的自衛権を容認して即戦争というわけでないことは誰にもわかっています。

では、今、我々はどうすればいいのでしょう。一つ言えることは、歴史上のいかなる戦争にも共通していた理不尽を受け入れる覚悟をすることが絶対に必要だということです。子どもが親より先になくなる理不尽、ある人は戦場に立たされているのに普通に生活できている人がいる理不尽、亡くなる者と生き残る者がでる理不尽、安全な場所で作戦を決め命令した人間は生きているのに命令された人間が命をとられる理不尽、人を殺すのもこの世界を維持するためにやむをえないと自分に言い聞かせなくてはいけない理不尽、自分のかわりに誰かが死ぬ理不尽、たくさんの命のおかげでなった成功なのにそれを自分の手柄のように語る人間・集団が出る理不尽などを受け入れる覚悟がいるのです。祖父母、父母の世代は、「国体護持」の名の下、この理不尽を受け入れてきました。我々の世代は、全くこの覚悟はいりませんでした。

「23」「33」これは、イラク紛争の時のポーランド・イタリアの兵士の犠牲者数です。0との違いは無限大です。

孫ができたばかりだというのに、「教え子を戦場に送るな。」が夢幻になりつつある今、「積極的平和外交」の名の下で、これからの子たちにこの理不尽を受け入れるための覚悟をさせることが教師の使命になっていくかと思うと悲しいです。

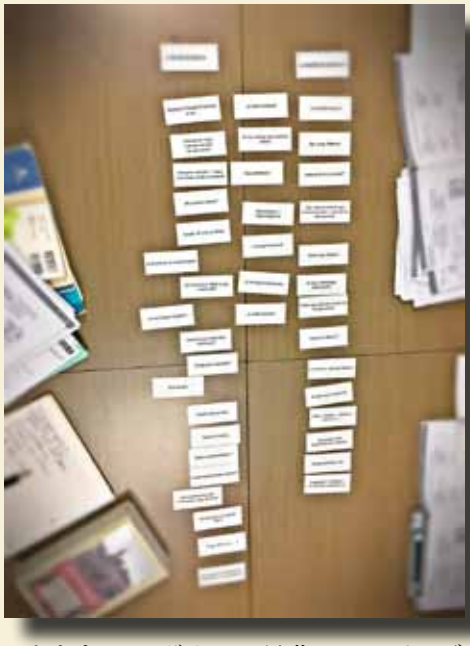
そんな日本に帰国します。

（さとう・かずひこ）

Tokióハンガリークラス

ハンガリーへ留学する若者やハンガリーへ進出する日本企業の赴任者の数は、数年前から増加しています。特にハンガリーの医学部への留学を目指す学生さんや音楽大での勉強を希望している人が多いようです。日本では、ハンガリーという国の印象はまだまだ薄いと言えますが、ここ最近では、少しずつその存在が知られるようになっていると感じられます。

様々な目的で長期にハンガリーに滞在される皆さんにとって、ハンガリー語とはどんなものなのでしょうか。大学のゼミは英語ででも大丈夫だし、生活の上でも英語が通じるだろうと考えている人たちが多いようです。確かに、そうかもしれません。しかし、英語のみであると、コミュニケーションを図れる範囲は非常に限られてしまうと思います。また、日本人にとっては、ハンガリーの人たちの行動や日常生活における習慣において、非常に理解しにくいところがたくさんあるかとも思います。例えば　「ハンガリー人ってどうしてあんなに悲観的なの?」「ハンガリー人って話の内容を何度も何度も同じ言い方で繰り返しているなあ」といった感じでしょうか。こういったことを理解するには、やはり「言葉を知る」ことが不可欠になってきます。ハンガリー語という言語は、ハンガリー人の考え方やハンガリーの文化、歴史を反映しています。これは、他の世界の言語にも共通することでしょう。ハンガリー語が分かるようになると、目の前にある現状も理解できやすくなりますし、ハンガリーの人たちとの生活はますます楽しくなるのではないかと思います。恐らく、皆さんのハンガリー滞在期間の大きな目的に一つには、楽しい生活や友達作り、ハンガリーでしかできない体験をたくさん積むことがあげられるのはないでしょうか。



こういった要望に応えるために、コミュニティ「Tokióハンガリークラス」を3年前に立ち上げました。東京在住20年を超えた私は、駐日ハンガリー大使館で15年間働いた経験もあります。これまでの経験を通して、日本人がハンガリー語を学ぶ際にはどのようなことが難点になるのか、上達するにはどのようなポイントを抑えるのが効果的なのかということを、受講される皆さんにぜひ伝えたいと思っています。ハンガリー語は多くの人から「悪魔の言葉」と言われていますが、学習してみると新しい世界が広がって来るものです。これまで挑戦してみたけれど諦めてしまったという方でも、新たに始めてみてはいかがでしょうか。

「Tokióハンガリークラス」は、すでに留学した学生さんたちのハンガリー語学習をスカイプレッスンにてサポートしたり、ハンガリーへの渡航前に、東京都内で開講している集中講座にて現地での生活の準備を手伝ったり、ハンガリーから帰国した方々のハンガリー語ブラッシュアップをしたりしています。また、ハンガリーのフォークダンスを楽しんでいる方々や趣味でハンガリー語に関心を寄せている方々向けの定期講座も開いております。その様子や受講生の声を是非ホームページに掲載しておりますので、ぜひ一度ご覧ください。www.hangarigo.com

また、フェイスブックのアカウントをお持ちの方はTokióハンガリークラスのページもご覧になって下さい。https://www.facebook.com/Y.Gyoengyi/

ご興味のある方は、いつでもお気軽にお問合せ下さい。

tokyohangarigo@gmail.com

柳澤Horváth(ホルヴァート) Gyöngyi(ジュンジ)

編集部よりのお知らせ

「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。

http://www.danube4seasons.com

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書でお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

みどりの丘補習校

緑の丘日本語補習学校バザー

あっという間に完売

藤岡　摩里子

去る11月25日土曜日に補習校恒例のバザーが行われた。バザーは保護者にとって1年のうちの一大イベントで、数か月かけて準備を重ねていっている。小学1年生のわが息子にとって、そして私にとっても初めてのバザーだった。出品するものは、家庭で不要となった衣類・雑貨・日本語書籍、日本食を中心とした食品、保護者手作りのクラフト品である。

「これはいいね」、と感心したことは、保護者によって設けられた出品の他に、「子どもブース」と名付けられた補習校児童・生徒による出店が設けられていることだ。不要となったおもちゃや雑貨などを出品して自分の店を出し、自分で店番をしてお客さんからお金をいただく。そして売上金の一部を補習校に寄付するかどうか、いくら寄付するか、を自分で決める。つまり、企画から出店準備、会計まですべて子どもたちが主体となり自主的に行う。最近は子どもの職業体験型アミューズメント施設、あるいは職業体験イベントが人気だったりするが、そんなのにわざわざ行かなくても実際にちょっとした職業体験ができる、という点で子どもたちにとってとても良い機会であると思う。

当日私は食品ブース担当だったのでここでは食品販売がどのようであったか紹介したい。今年はお寿司、お稲荷さん、おにぎり、抹茶味を中心とした焼き菓子、そして即席麺を販売した（即席麺はハンガリー日清様からご提供いただきました、ここに謹んでお礼申し上げます）。ほとんどは保護者の手作りである。ハンガリーで手に入りにくい材料は食品ブースリーダーが日本から調達してきてくれた。多くの保護者が手作り品を提供してくれて当日食品テーブルが華やかになったのもつかの間、開場後わずか30分でお寿司・お稲荷さん・おにぎりは完売となった。そして閉場前にはすべての食品が売り切れた。お客さんは在留邦人のみならず、大学で日本語を学んでいる大学生、日本カフェの経営者、といったハンガリー人も多数で、日本食に対する大きな興味や関心を実感した。

実は補習校バザーの一か月ほど前に我が家の子どもたちが平日通うブリティッシュスクールでインターナショナルフードコートなるものがあり、保護者が自国の食べ物を用意して国ごとのテーブルにて全校児童・生徒と教職員にふるまうイベントがあった。日本テーブルは3人しかいない日本人ママががんばってのり巻き・お好み焼き、抹茶クッキーを百単位でたくさん作っていったが、ひとつ残らずすべて無くなってしまった。テーブルがまっさらになっていたのはみたところ日本テーブルだけであったようだ。大概の子どもたちはみんな「Sushi!」と叫んでのり巻きを取っていき、ある小学生は何度も繰り返しテーブルに来て何個ものり巻きを食べ、ある中学生の女の子は「日本大好きです」と日本語ではにかみながら言って抹茶クッキーを取っていった。「これは何？どうやって食べるの？」とお好み焼きのことを熱心に聞いてくる教職員もいた。

このように、日本食の人気を実感する機会に多く触れることができたのは私にとって幸せであり、補習校バザーに参加できたのは貴重な体験だった。さて、我が息子はどうだったかというと、先に紹介した子どもブースに「参加する？」と聞いてみたのだが、「わからない」と。そもそもバザーというものに参加したことがなく、それがなんたるものかがよくわかっていなかったので説明して、子どもブースではいらなくなったおもちゃとかを売って・・・、という話をしたら「おもちゃはみんないる。やらない」と明言。子どもブースは来年以降に、とあきらめて、当日に食品ブースで品出しやお金のやりとりを手伝わせた。楽しかったようだ。

ちょうど補習校バザーの一週間後にブリティッシュスクールでクリスマスフェアーがあり、息子の学年は授業中にみんなでクッキーを作ってそれをクリスマスフェアーで売って収益金を孤児院に寄付する、という企画をしていた。フェアー当日にクッキーを販売するボランティアを募っていたので、また販売お手伝いをするちょうどいい機会と手を挙げた。当日10時開場、我々の販売担当時間は11時30分、その時間に到着してみたらクッキーは3袋しか残っていなかった。息子のために1袋買って、隣にいた人が残りを買って完売、我々の販売のお仕事はそこで無しに。

息子の活躍は来年に期待しよう。

（ふじおか・まりこ）

みどりの丘補習校

恒例の補習校バザー

岡本　聡子

すっかり冷え込むようになった11月の土曜日に毎年恒例の補習校バザーが開催されました。補習校で子供の行事は入学式、始業式、卒業式、遠足、学習発表会、かるた大会など年に何度かありますが、保護者が主役になって行う行事はバザーのみです。いつも子供のサポート役の保護者の方たちもバザーでは主役になってそれぞれの持ち場につきます。会場は補習校にある大きなホールで行われますが、雑貨、衣類、書籍、食品、子供ブースに区分されています。雑貨、衣類、書籍などは土曜日ごとに前もって補習校の方へ各自持ちより、その場で区分、整頓、値付けがされていきます。バザーとはいえ、新しいものがあったり、数回しか使用してないようなものも多く集まってきます。私も日々思うのですが特に子供のものなど、必要なので購入しますが、余り使用せず、状態の良いままで家に置いてあるものがあるものです。人から頂いたもの、自分で選んで購入したものなど様々ですが、それぞれ思い入れがあり簡単に処分することができないで家に置いてあるものが結構あります。

私もある日の休日に思い切ってこの機会に子供の衣類、おもちゃの整理をし、次の方に使っていただければいいなあと思い補習校へ持って行きました。今年の衣料、書籍の販売方法は新しい工夫がされ、一点ずつ購入するのではなく、まず袋を購入していただいてその袋に詰め放題という新しい販売方法になりました。これは売り手には値付けの不要、購入時のお金のやり取りがスムーズになる、買い手の方も値段を確認しなくて良い、詰め放題という楽しみがプラスされ、さらに売れ残りを減らすこともできるのではないかというとても良いアイデアです。購入方法が変わったことで、お客様に説明をしている姿は何度か見かけましたが、皆さんスムーズに買い物を楽しいんでいるようにみえました。

私は昨年と同様、食品ブースの担当をさせてていただいました。朝にお米を炊いて、渡された寿司のもとを混ぜて娘を送った後に会場へ向かいました。事情があり少し遅れて参加したのですが、すでに皆さんエプロン姿で作業準備に取り掛かっているようでした。昨年もそうだったのですが、皆さんと食品の準備をする作業と、販売が結構楽しいもの

みどりの丘補習校

です。私は娘の送り迎えを夫に頼んでいるため、補習校で保護者の方々とお話をする機会も少なく未だに児童と保護者の顔が一致しないことがあります。送り迎えだけで保護者の方と知り合うきっかけがない方や、一年生の保護者の方などにはバザーに参加することで他の保護者の方々とお話しできる良い機会でもあります。

私も早速エプロンをして、稲荷寿司のお手伝いをしました。稲荷寿司を作ったのは何年ぶりだろうと思いながら、皆さんとの会話を楽しみながら準備ができました。同じ補習校の親同士ではありますが、ハンガリー人の旦那さんがある方、旦那さんがハンガリー人ではない方、両親とも日本人の方など皆さんそれぞれ状況が違うので話を聞いていて勉強になることが多いです。

今回の食品ブースではハンガリー日清様より沢山のインスタントラーメンと、焼きそばのご協力があり、食品ブースで販売させていただきました。セットでオリジナルのお箸も提供して頂き、大盛況のうちにすべて完売することができました。補習校のバザーということもあり主に日本食を中心に販売をしています。毎年販売しているお寿司もやはり人気で早いうちに完売となりました。面白いことに、お寿司についている、お醤油、ワサビも最後には購入したいという方があり、値段をつけると売れてしまいます。昨年も同様のことがありましたのでここでは普通のことのようです。また日本らしいスイーツとして抹茶を使った御菓子も沢山用意されています。これらは保護者の方々からの協力で、自宅で焼いて来てくださって当日販売しています。御菓子もラッピングも見栄えがよく皆さん本当にお上手です。私も抹茶の御菓子をいくつか購入して味見をさせていただきました。抹茶はこちらではなかなか手に入りにくいものですので、バザー係の方が日本に一時帰国した際にバザーの為に購入し其れを使用して御菓子に使用したということです。抹茶の御菓子は日本の方には貴重なこともあり人気ですが、地元の皆さんも好んで購入されていました。

バザーの開催から瞬く間に売れていく食品ですが、私が販売担当していた、水、お茶、コーヒーは残念ながら売れ行きが思わしくありませんでした。ただ後半には段々と売れ始めたので、お買い物が済んだ後で飲み物を購入されているようでした。

そろそろ会場を閉める時間が近づき、片づけをはじめていたころ出口付近の階段で大きな荷物を二つ持ったハンガリーの年配の女性の方を見かけました。後ろから階段をついて上がっていた私は思わず「荷物をお手伝いしましょうか？」と声をかけるくらい大きな荷物を持ってゆっくり階段を上っています。荷物をお持ちし、「沢山買っていただいたのですね！」とたずねたところ「実は毎年楽しみにしているのよ。」と満面の笑顔での返事でした。昔はピアノの演奏をされていたとのことで1970年代以来の日本人のお友達がいらっしゃるとのこと。お友達は素晴らしい声の持ち主で、オペラ歌手をされているとのことでした。今は年齢もあり行き来をすることも少なくなってしまったとのことですが、手紙でのやり取りは今でも続いているという素敵なお話をしていただきました。日本人の友人がいることもあり、補習校のバザーは毎年楽しみに参加していただいているとのことでした。

荷物をお持ちして門のところまでお送りし、「また来年もお待ちしています」といってお別れをしました。バザーで思わぬ出会いもあるものだなあと感心してしまいました。その後持ち場にもどり片付け、掃除、すべて済んだ後は会計報告があり終了となりました。私は参加二度目のため、昨年と比較することしかできませんが、皆さんの新しいアイデアの甲斐があり昨年よりも良いものになった印象をうけました。今後もアイデアを出し合い更に良いものになっていくように私も協力できたらと思います。

（おかもと・さとこ）

日本人学校

3年間での「初めて」

大久保　雄司

あっという間の3年間。駆け抜けるように進んだ日々で見つけた「初めて」について紹介しようと思う。

最初に、1年目についてである。この年は，今までの人生の中で，経験したことのないようなことだらけで新鮮な1年間であった。まず、初めての1人暮らしである。生まれてから一度も故郷「香川県」を出て暮らしたことがなかった私が，初めての1人暮らしを外国ですることになるなんて思ってもみなかった。大学時代の友人が「1人暮らしは気楽でいいぞ」なんて言っていたが、外国ではそうはいかない。食事・洗濯・そうじなどやらなければならないことが山ほどある。日々の生活の中で、仕事と両立することは非常に大変だ。両親共働きだった我が家の母親や私の妻は、何も言わずにこれらをこなしていた。到底かないっこない・・・。女性の偉大さを感じられた1年だった。

次に，日本人学校での仕事である。初めて2年生を担任することになった。とてもかわいい2年生たちに囲まれて、非常に楽しい1年間を過ごすことができた。叱ったり、笑ったり、遊んだりとたくさんの思い出ができた。お別れすることになった子どもたちもたくさんいたけれど、悲しむだけではなく，新たな旅立ちを応援することもできた。また、いろいろな場所から来ている子どもたちや先生方と話ができたこともよい経験になった。習慣や言葉の違いを楽しみながら過ごせた1年間だった。

最後に、「子どもの誕生」である。ブダペスト日本人学校に赴任が決まった時に、子どもができたことも知らされた。大きな喜びとともに不安がよぎった。それは、妻や子どもと離れて1年間暮らさなければならなくなることを意味していたからだ。しかし、無理を言って帰国させてもらった際には出産に立ち会えたし、パソコンやスマートフォンを通じて妻や子どもの顔を見ながら話をすることもでき、不安や寂しさも乗り越えていくことができた。

次に、2年目の大きな出来事は，妻や子どもとの生活である。4月にリストフェレンツ空港で妻と子どもを迎えた。約8カ月ぶりの再会。娘は当然寝ていたが、無事にハンガリーで2人を迎えられたことが本当にうれしかった。妻と日々成長していく娘との生活は、大変楽しく、ハンガリーでの生活をより充実したものにしてくれた。

最後に、3年目についてである。今年度は一番経験がある3年目教員の1人として仕事に取り組んだ。ついこの前までは、先輩の先生方に教えてもらいながらしていたことを今度は伝える立場になってしまった。元来、人にわかりやすく伝えることが苦手な私が上手に伝えられるだろうかと心配しながら仕事をしてきた。幸い、他の先生方の助けを得ながら、何とかここまでがんばってこられたように思う。やはり、人間1人では何もできない。たくさんの人と協働することで、できたときの喜びや達成感は何倍にもなる。そんなことを改めて感じた1年間であった。

ハンガリーに来た3年間でたくさんの人と出会い、たくさんの人とお別れしてきた。そのたびに、新たな気づきがあったり、別れを惜しみながらも悲しみや喜びを共有したりすることができた。その一つひとつが、かけがえのない思い出として今の私の心の中に深く刻まれている。ここで出会った思い出を胸に、また新たな一歩を進んでいこうと思う。

（おおくぼ・ゆうじ　日本人学校勤務）

GERE

GERE ATTILA PINCÉSZETE

薬剤に頼らない、自然のサプリメントを！
赤ブドウのポリフェノールを凝縮した
オイルと粉末で健康を維持しましょう！

KÉKSZÖLÖMAG & HÉJ

ポリフェノミクロン（商標登録申請中）
ポリフェノールを ふんだんに含む 有機栽培赤ブドウの果皮と種を粉砕し たミクロ粉末
ポリフェノール成分: 5gの粉末はおよそ250mgのポリフェノールを含む。
使用法: 粉末をそのまま食することは避け、ヨーグルトなどに混ぜて食する。
1日の摂取量: 1日に小さじ1杯の粉末を2会に分けて摂取。

100 % SZÖLÖMAG OLAJ

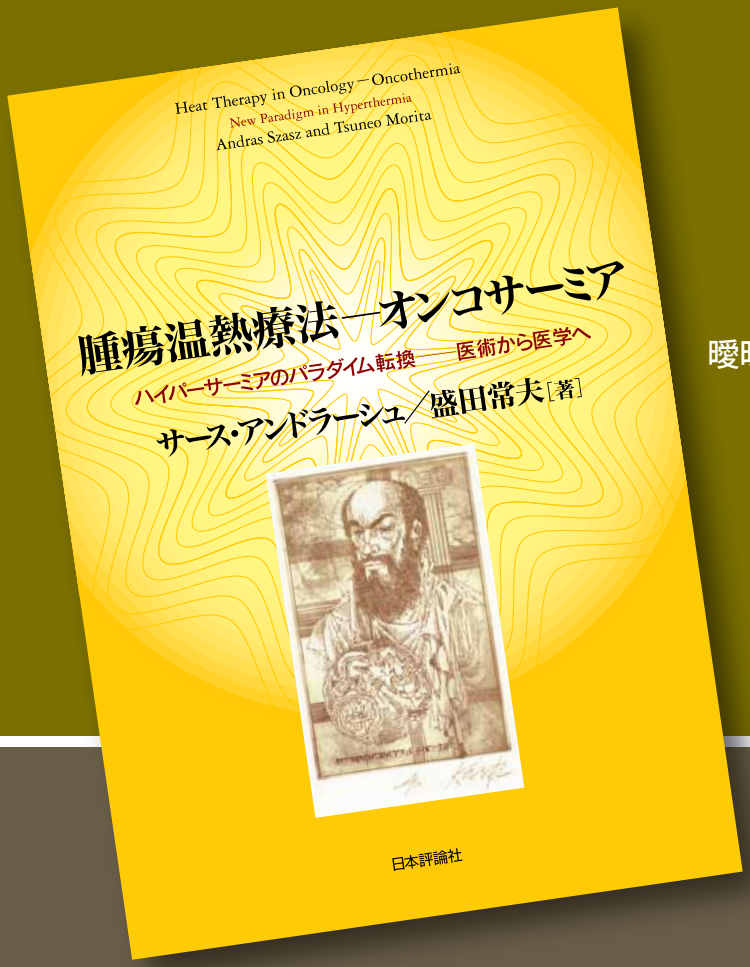
ポリフェノールと不 飽和脂肪酸を含んだ 赤ブドウの極上低温圧搾シードオイル

成分構成: 不飽和脂肪酸 min. 80%,　ポリフェノール min. 6%
使用法: サラダなどの冷たい食べ物に直接かけたり、パンへ直接かけて、ほのかな香りを楽しみ、食欲を増進。
1日の摂取量: 小さじ1杯（およそ5g）を毎朝、可能な限り、空腹時に摂取するのが望ましい。

SZŐLŐMAG & HÉJ MIKROŐRLEMÉNY

ポリフェノミクロンはカプセル製品でも販売されています。

GERE通販サイトで購入できます：https://gere-club-japan.com



温熱治療のパラダイムを転換する

温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。
曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

第1章　ハイパーサーミアの歴史と評価
1.1　ハイパーサーミアとは何か
1.2　ハイパーサーミアの曖昧さと課題
1.3　ハイパーサーミアの歴史的概観
1.4　腫瘍治療のハイパーサーミア

第2章　ハイパーサーミアの物理学
2.1　電磁気学の基礎概念
(1) 電磁気現象
(2) 電場と磁場
(3) キャパシタ
(4) 位相シフト
(5) インピーダンス
(6) 電磁波
2.2　バイオ電磁気学
(1) 電磁波スペクトル
(2) バイオインピーダンス
2.3「非熱」効果
(1) 非温度依存（NTD）効果
(2) 電磁場におけるNTD効果
(3) 電磁気による目標選択
(4) 電磁気と生体システム

第3章　ハイパーサーミアの生理学
3.1　生体におけるエネルギー、熱、温度
3.2　生体における温度制御
3.3　生体の加熱と体温
3.4　加熱による温度の分布
3.5　全身加熱と局所加熱の本質的な差異
3.6　加熱と冷却：リスクとその回避
3.7　温度測定と熱積算量（ドーズ）

第4章　腫瘍温熱療法
4.1　腫瘍温熱治療の基本概念
4.2　ハイパーサーミアの手法
4.3　熱の作用と併用効果
(1) 熱と血流
(2) ハイパーサーミアの併用効果
4.4　ハイパーサーミアの熱生成
(1) アンテナ放射
(2) 磁場（コイル）
(3) 容量性カップリング
(4) 伝導加熱
4.5　ハイパーサーミア治療が抱える問題

第5章　オンコサーミアの理論と方法
5.1　電場の利用
5.2　細胞燃焼
5.3　腫瘍治療における細胞加熱
5.4　ミクロスコピック加熱
5.5　集束化の原理
5.6　温度の役割
5.7　安全性
5.8　積算量（ドーズ）
5.9　臨床事例

第6章　自然療法としてのオンコサーミア
6.1　ホメオスタシスの復位
6.2　細胞の自然死の促進
6.3　細胞転移の阻止
6.4　転移がん細胞に作用

コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得て コルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込） ◆A５判／ISBN 4-535-55473-0 日本評論社

体制転換の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学部の定番テキスト。体制転換の理論と転換直後の現状を分析。各大学で教科書として使用。

盛田常夫著

第一部　社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の比較分析に新たな視点を提供。

第二部　ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体制転換の違いを解明。

■ 新世社　新経済学ライブラリー20　定価2781円（税込）

なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人　マルクス・ジョルジュ［著］盛田常夫［編訳］

■ 定価 3045 円（税込）　A５判
■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」（米原万里）、「週刊ダイヤモンド」（北村伸行一橋大学教授）で書評。

ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞（2010年3月21日）ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

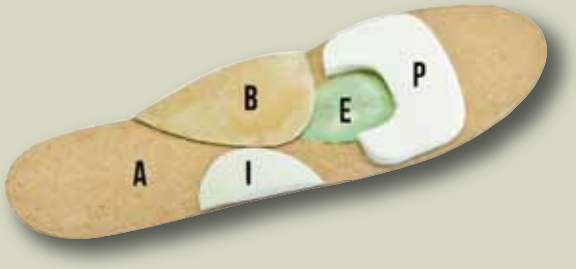
盛田　常夫著　　日本評論社　定価3800円

足裏圧力測定から
オーダーメイドのインソール制作

理想的な圧力図

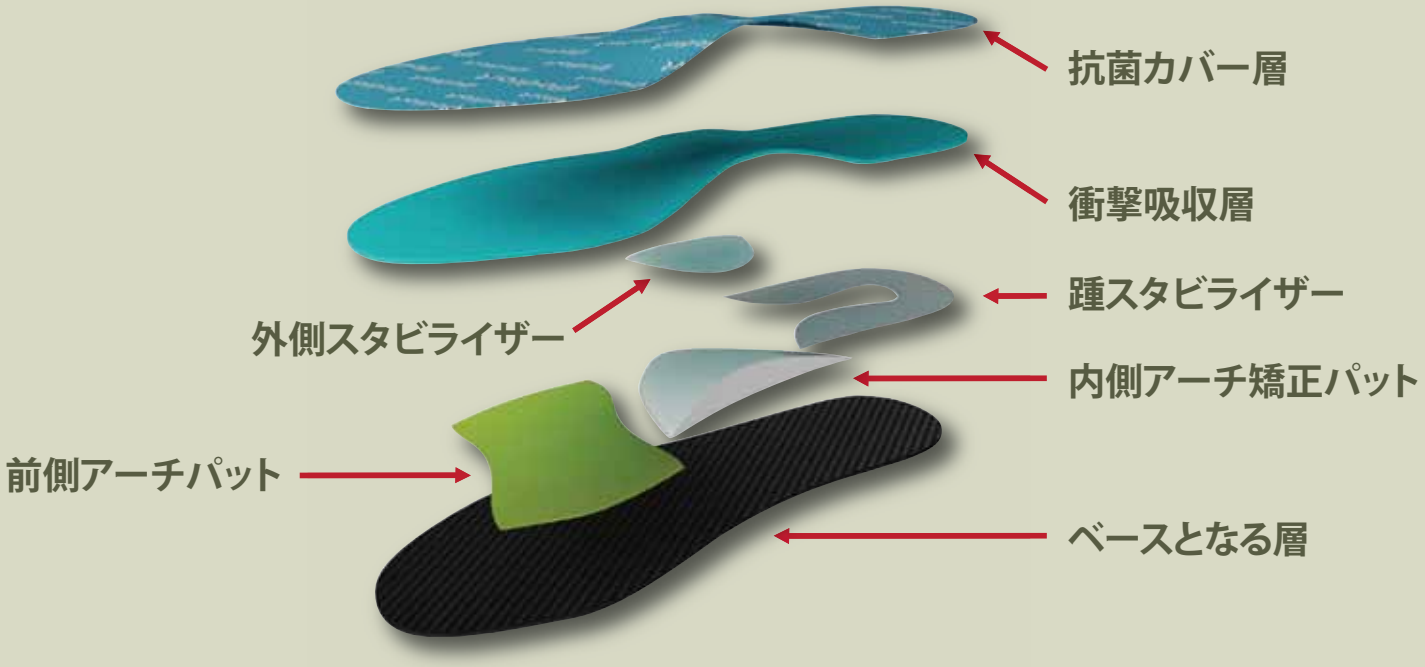
あなたの足裏圧力を
測ってみませんか？

自分にあったオーダーメイドの
インソールを造りませんか？



熟練したデザイナーが貴方に適した
インソールを作成し足裏圧力を矯正します

ハンガリーPodiart社が制作する
オーダーメイドのインソール構造



問い合わせ：morita.magyar@gmail.com

Podiart™はハンガリーPodiart社の商標です